

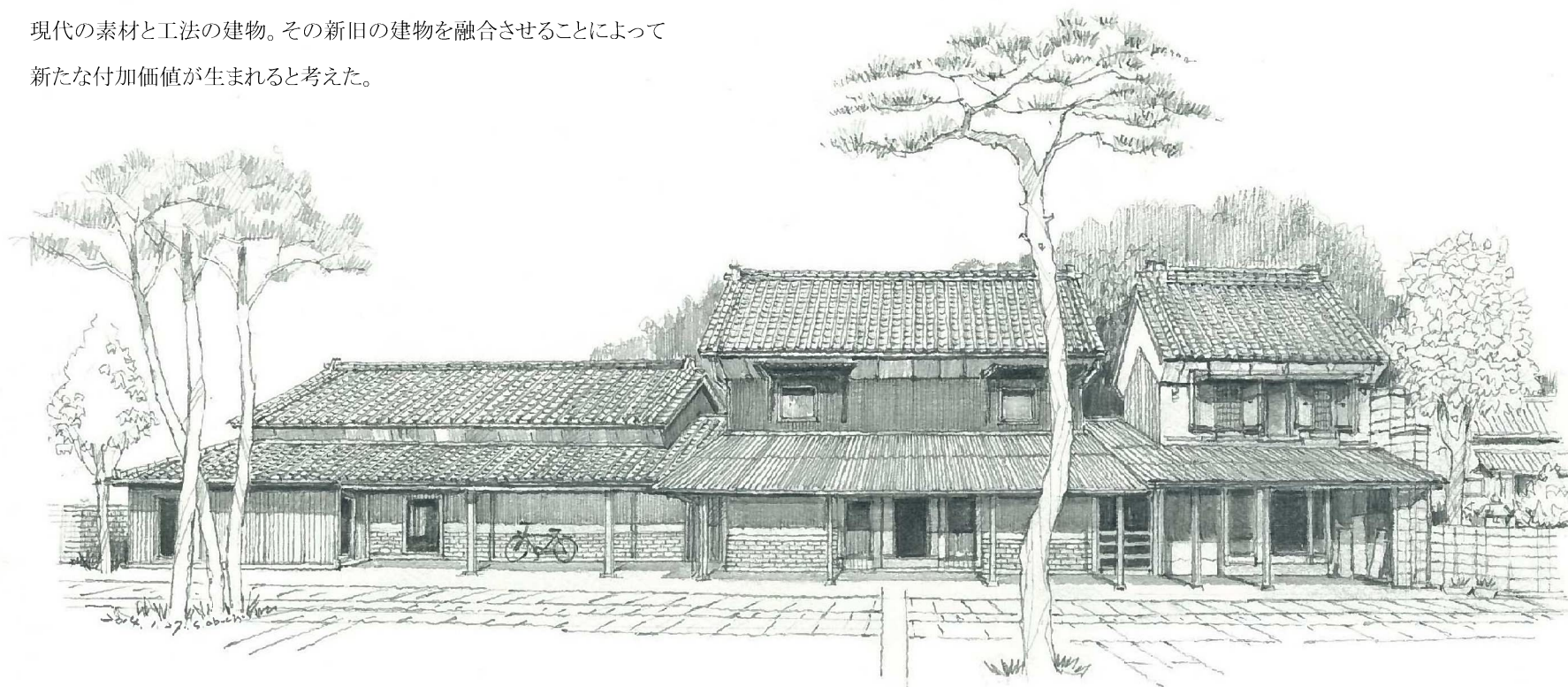
旧日光街道に残されていた風景

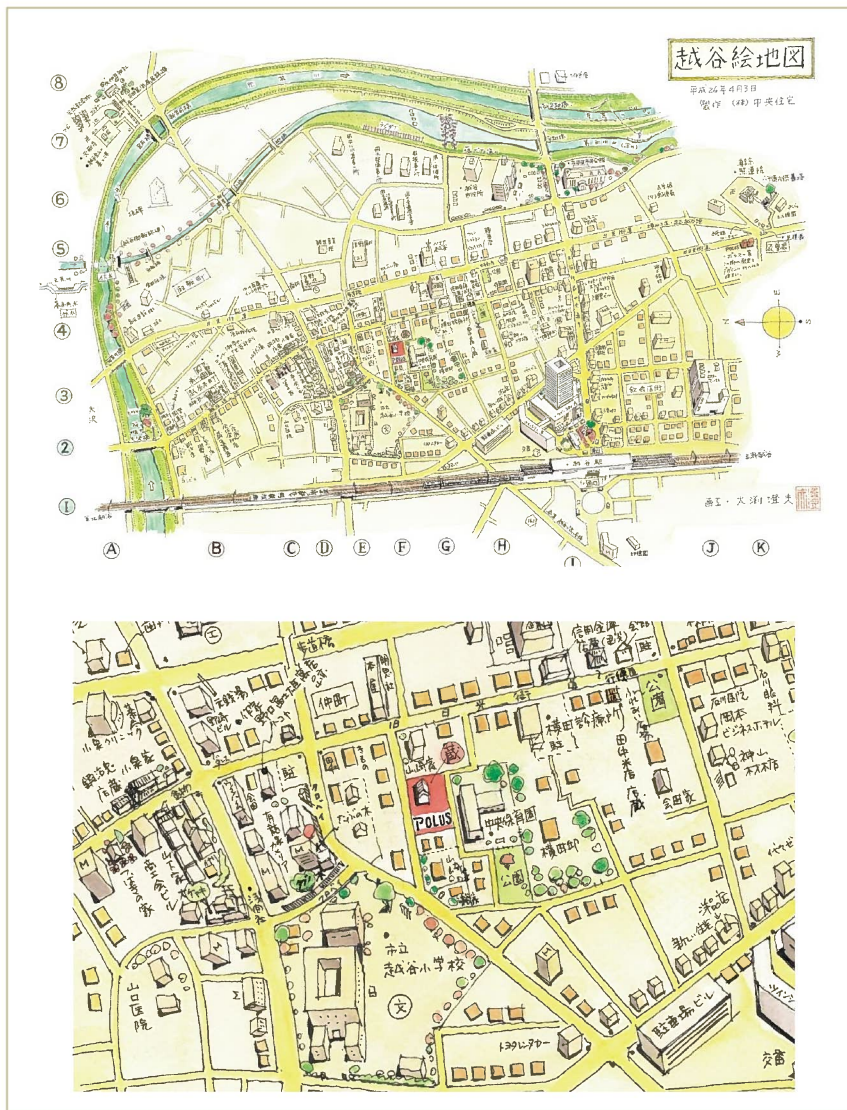
開発地である越谷市は江戸時代、日光街道で大規模な宿場町のひとつであり、同街道沿いには蔵や古民家のある風景が点在している。

今では入手困難な材や匠の技法などを有する歴史的価値の高い建物と

現代の素材と工法の建物。その新旧の建物を融合させることによって

新たな付加価値が生まれると考えた。



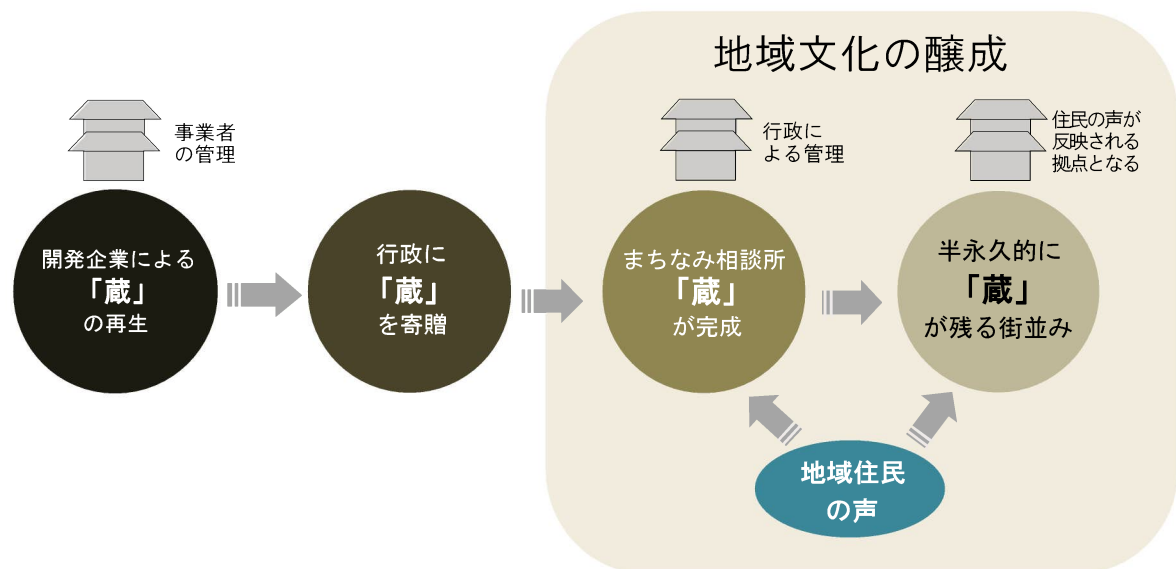


蔵を再生し、地域文化を醸成させる仕組み

地元越谷を中心として開発事業を進めてきた私たちだからこそ、失われつつある旧日光街道の景観を取り戻すべく「蔵を残す」価値があった。

ただ補修するだけでは蔵を未来へ繋ぐことは出来ない。そこで、所有者の事情に左右されぬよう行政へ寄付し、街のコミュニティの場として運用することで、永く愛される仕組みを提案した。

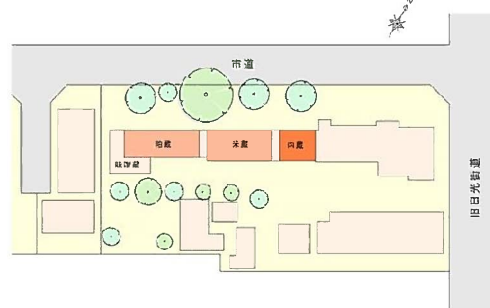
すべての意味で「蔵のある街」を目指した。



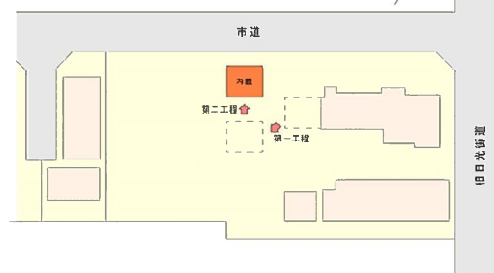
蔵の再生と曳家



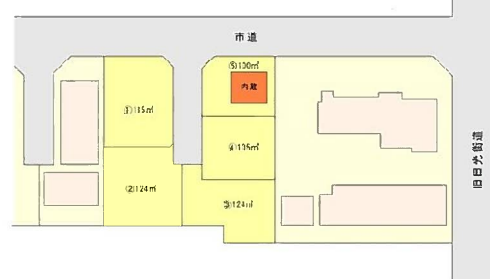
①内蔵・米蔵・粕蔵が現存



②江戸末期(推定)に建てられた内蔵を曳家で移動
第一工程…平成25年3月14日
第二工程…平成25年10月2日



③曳家終了後、開発の事前協議を行い、
蔵と新築4邸の計5区画にて進行



平成25年10月2日

曳家による再生

蔵を曳いた職方は、地元越谷市に四代に亘って続く有限会社野口組。「頭」と呼ばれ江戸時代の火消頭にあたる、市内に数少ない歴史のある業者。曳家は、太古の昔より存在した仕事であり、現在は文化財の保存に係を大きく占めている。

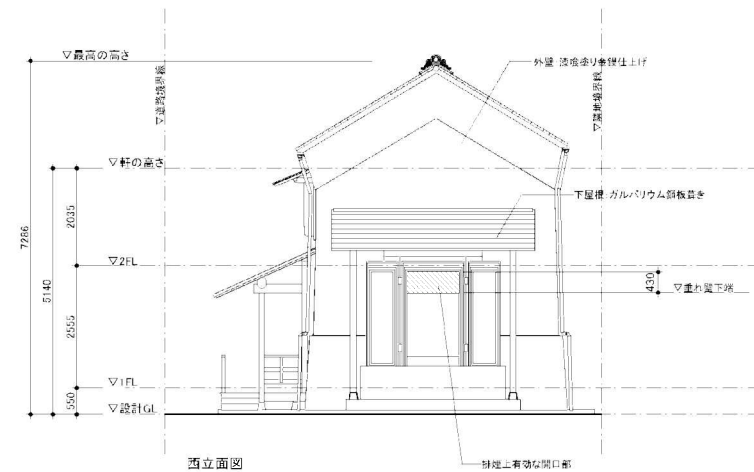
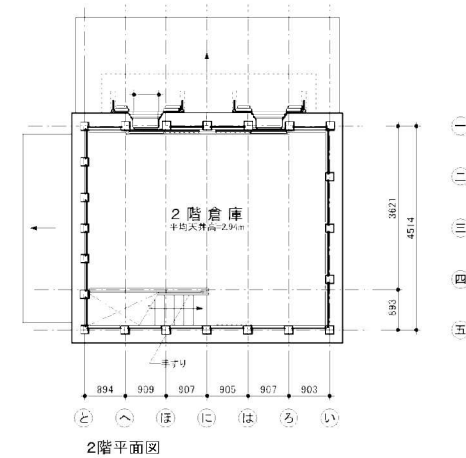
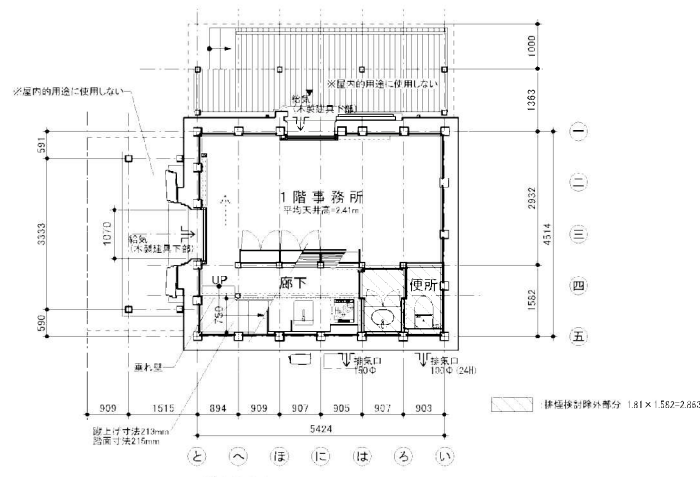
また、「蔵のある街」に住まうことへの関心を高め、街への愛着を育成するため、地元越谷小学校の生徒を招き体験学習を開催。「職人」の「仕事」を直に見て、触れた生徒たちの今後の活動が期待される。

蔵の補修計画

現地調査での蔵の外壁は黒い物であったが、それは戦時中の空襲を逃れるための対策であり、本来は白漆喰の壁であった。そのまま残すのではなく、当初の姿である白漆喰壁にて補修し、再生した。

■『蔵』概要

- 推定竣工時期：江戸時代末期(1868年以前)
- 推定築年数：約150年
- 構造：木造2階
- 屋根：瓦葺き
- 外壁：漆喰塗り
- 用途：内蔵
- 面積：延べ48.96㎡(14.8坪)
1階／24.48㎡(7.4坪)
2階／24.48㎡(7.4坪)
- 高さ：7.2m



蔵の補修計画 - 2

蔵を活用し、運用できて初めて未来へと「繋ぐ」こととなる。

今後、越谷市へ寄付し、コミュニケーションの場として様々な用途で利用され、

「蔵のある街」として永続していく。

